

## 特集 - 町を出たその先で。

# 妹背牛出身者はいま、ここで生きている

町を巣立ち、それぞれの場所で力強く歩み続ける人たちがいます。

◇ スポーツ、芸術、食、専門技術

——活躍の舞台は違っても、胸の奥には今も変わらず「ふるさと」の風景が息づいています。

◇

進学や就職をきっかけに町を離れた日。新しい環境への不安と期待を抱きながらも、一歩踏み出したあの瞬間が、今の自分につながっている——そう語る方は少なくありません。

◇

今回の特集では、町出身で国内や海外を舞台に活躍する5人にお話を伺いました。それぞれの挑戦の軌跡、支えとなった故郷の思い出、そして今も心にある町への想いをご紹介します。

◇

遠く離れていても、ふるさとは心のよりどころ。その姿は、いま町で暮らす私たちにとっても、大きな励みと誇りになるはずです。

## 日本料理料理人／一色 けんじ 憲治さん

### HISTORY

一色憲治さんは、妹背牛町7区出身の日本料理料理人です。高校卒業後、札幌の調理師専門学校で基礎を学ぶため、故郷を離れました。東京での修業を重ね、調理の現場で腕を磨いてきました。

現在は東京を拠点に、日本料理研究会の副会長や企業の顧問として技術指導に携わり、日本料理（会席料理）の伝統と技を次世代に伝えていきます。

「70歳を過ぎても、まだまだ料理の奥深さを感じています。確かな技術と誠実な姿勢は、多くの教え子たちに受け継がれています。」

日本料理技能士会連合会の常任理事も務めるなど、その功績は高く評価され、厚生労

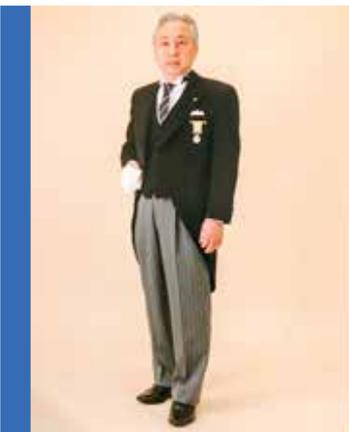


素材と向き合いながら、一皿一皿に心を込めます

### 母の言葉が、料理人の道を照らした——

働省の「卓越した技能者（現代の名工）」や令和4年春の褒章で黄綬褒章も受章しました。料理人を志した原点は、農家の次男として生まれた子どもころの経験にあります。

夜遅くまで仕事をする両親を手伝うため、一色さんは食事を作るようになりました。「憲治はいい板前さんになるね。」母に褒められた言葉が、料理人としての道を照らしました。多忙な日々の中、帰省時の楽しみは中学・高校時代の友人との懇親会です。バレーボール部に打ち込んでいた当時の思い出話に花が咲くという、人の温かさが、今も料理人としての原点を支える大切な土台になっているそうです。



日本料理界への貢献が高く評価され、2022年春に黄綬褒章を受章

## やすのり ますたに 増谷 康紀さん 声優



アニメ「パリピ孔明」のナレーションや「ONE PIECE」のキャラクターなど、声の世界で活躍する増谷さん

### HISTORY

妹背牛町1区出身の声優・増谷康紀さんは、現在東京都を拠点に活動しています。アニメや洋画、ゲームの声優業のほか、テレビ番組や企業向けビデオのナレーターとしても活躍しています。

声優を志したきっかけは、東芝に就職後のアフレコ体験でした。インターネット掲示板を介し、公民館の視聴覚室でアフレコ体験の催しを開いた際、声優養成所に通う人の参加を機に声優という職業への具体的なイメージが生まれたといいます。そこから挑戦してみたいという思いが強まり、養成所に入りました。

妹背牛を離れたのは小学校卒業の年で、家族とともに札

### 言葉に命を吹き込み、物語を届ける —

幌へ引越しました。進学による環境の変化に加え、都会の生活に馴染めるか不安も感じていたそうです。

妹背牛での思い出として、下校途中に板金加工場や精米所、馬の蹄鉄を付け直す作業場に立ち寄り、作業の様子をのぞいていたことを挙げています。「大人たちはそんな子どもに温かく接し、私はその日学校で習ったことを話していました」と振り返ります。

当時、冬には馬そりが走っていて、雪解け道に馬糞があるのが当たり前の春の風景でした。「馬を飼っている家が近所であり、触れさせてもらえました。その素朴さも魅力です」と話します。

また、郊外の友達の家から歩いて帰る途中、見渡す限り水田が広がる風景に圧倒された経験も忘れられません。「妹背牛町は農業の町」という印象が強く残り、米農業の話題を耳にするたび、「ふるさとの景色を思い出します」と語っています。

## ひさむらひろし スポーツトレーナー／久村 浩さん

### 選手の力を引き出す、フィジカルの専門家 —



プロ野球の舞台裏で選手の体づくりを支える久村さん

妹背牛町出身のスポーツトレーナー・久村浩さんは、プロ野球の現場で選手の体づくりを支えてきました。2016年から2017年にかけて東北楽天ゴールデンイーグルスでトレーニングを担当し、その後2018年から2025年まで読売ジャイアンツでフィジカルコーディネーターを務めました。

現在は、韓国のロッテジャイアンツでストリングスコーチとして活動し、選手の体力向上やコンディショニング管理に携わっています。競技力を支える裏方として、日々の積み重ねを大切にしながら現場に立ち続けています。

妹背牛での思い出として心に残っているのは、小学5、6年生の時の担任・渡辺先生存在です。また、かつて町内で営業していた藤井食堂のジャンボソフトクリームも忘れられない味だといいます。帰省した際には、母親と2人で食べる「妹背牛ラムジンギスカン」の塩味が定番になっているそうです。

# 室内楽・伴奏ピアニスト

たさか かな  
田坂 佳那さん

## HISTORY

妹背牛町出身で、現在はオーストリア・ウィーン市を拠点に活動する室内楽・伴奏ピアニストの田坂佳那さん。弦楽器や管楽器、打楽器と共演し、楽器奏者のオーディションやコンクール、音楽大学の入試や学内試験での伴奏、室内楽のコンサートなど、その演奏活動は多岐にわたります。ピアノは4歳から始め、もともと音楽が好きだったといえます。特に楽器と共演するピアニストを志すようになったのは、小中高時代にブラスバンドや吹奏楽部で管楽器を演奏し、アンサンブルや合奏を経験したことがきっかけでした。大学でピアノを専攻

し、伴奏や室内楽を数多く学ぶ中で、「自身が最も好きで適性のある分野が器楽伴奏や室内楽だと気づきました」と話します。大学進学を機に妹背牛を離れ、岩見沢市で学生生活を送りました。距離はそれほど遠くはなかったものの、妹背牛のどかな空気や家族が恋しくなり、頻繁に帰省していた過去を振り返ります。子どものころは、友だちと公園に集まって遊んだり、冬は広場で雪遊びをしたりと、一年を通して外で遊んだ風景が心に残っているそうです。自然の中で体感したさまざまな経験は、「音楽作品を解釈し演奏する際にとっても役に立っています」と話しています。



「いつか妹背牛に室内楽の演奏を届けたいです」と話すピアニストの田坂さん

自然に育まれた  
感性で奏でる、  
室内楽の世界——

# 美術家 / たかはし きよし 高橋 喜代史さん

## HISTORY

妹背牛町1区出身の美術家・高橋喜代史さんは、現在札幌市を拠点に活動しています。2007年から言葉を用いた立体作品や、パフォーマンスを記録した映像作品を制作し、国内外で個展やグループ展に参加してきました。

2015年には一般社団法人PROJECTAを設立し、展覧会やスクールの企画運営など、美術に関わる事業にも取り組んでいます。現在は作家としての制作と、企画

運営の両面で活動しています。もともとは漫画家を志し、イラストの専門学校に進学。その学校にゲスト講師として訪れた現代美術のアーティストとの出会いが転機となり、現代美術の制作を始めました。それまで美術は苦手嫌いだったといえます。

進学を機に札幌へ移る日、祖母が涙ながらに見送ってくれた姿が今も忘れられません。「車が見えなくなるまで手を振り続ける姿に寂しさと不安を感じ、そんな自分に驚きもしました」と振り返ります。

妹背牛では友人たちと過ごした日々が心に残っています。「マイペースでいられること、夜の静けさの中で自分と向き合えること、自転車で会いたい人にすぐ会いに行ける距離感も町の魅力」と話します。

帰省の際には妹背牛温泉「ペル」に必ず立ち寄るそうです。将来は妹背牛発信のアートプロジェクトや展覧会にも挑戦してみたいと考えています。



言葉を用いた作品に定評のある美術家・高橋さん  
主な受賞歴：札幌文化奨励賞（2025年）、本郷新記念札幌彫刻賞（2020年）、JRタワーアートボックス グランプリ（2010年）

静けさの中で培った、想像力のかたち ——

## 多彩な才能は、妹背牛の原風景から始まった——



広く澄んだ青空、季節ごとに表情を変える田園風景は、妹背牛で育った人々の心に深く刻まれた原風景です。

プロ野球の現場で選手たちを支える久村さん、後世に日本料理の技術を伝える一色さん、ウイーン市を代表して大阪・関西万博の会場で演奏した田坂さん、言葉を題材にしたポスターを掲げる高橋さん。それぞれの写真には、異なる舞台で力を尽くす現在の姿が映し出されています。

声の世界に身を置く増谷さんは「皆さんの手でより良い未来の姿に」と妹背牛への期待を込め、食で人をつなぐ一色さんは「勇気を持って、たくさんの人たちと交流して」と呼びかけます。創作活動を通して現代社会を見つめる高橋さんは「(人生の選択に)迷ったら、こわい方へ」と語り、それぞれが自らの経験を踏まえて若者たちの背中を押しします。

原風景は、挑戦を支える力。妹背牛に誇りを持つ人たちの新たな物語は、ここから生まれています。